

の「銀繰り」(大坂での借金の調達)を円滑にすると同時に、藩札で産物を買集め、大坂に送ることによって得た金銀を藩庫に入れる方法で正貨を獲得しようとしたのである。

五 日田商人との結びつき

日田掛屋千原 万延元年(二八六〇)に万屋助九郎が二人扶持を頂戴した理由に、産物会所仕組に利益が**幸右衛門家** 上がったこと、日田表での御元方銀談が度々都合よくいったことがあげられている。

前述したように、千原家は寛政五年に幕府の掛屋を拝命したが、千原家が小倉藩・領民との関係をもちはじめたのは次のとおりである。藩に対しては文政十年(二八二七)に少額の貸金があった。次いで、小倉商人の蔵元彦六に天保期(一八三〇―一八四四)に少額の取引があった。農民に対しては天保十四年(一八四三)・弘化元年(一八四四)に上毛郡の者に各一〇〇両、嘉永元年(二八四八)に田川郡の者に一五両、同二年仲津郡内の者に一〇〇両の取引があったが、本格的になったのは嘉永五年(二八五二)に宇島の万屋との結びつくことよってである。嘉永五年(二八五二)に従来仲津藩領の小祝浦から船出していた大坂向けの日田の諸産物を小倉藩の宇島経由にし、万屋が扱うという契約が結ばれた。

そして、安政元年(二八五四)に小倉藩の「御用達」、翌年に分家の新田藩の「御用達」になった。同地には既に俵屋藤作という商人が小倉藩の御用達を務めていたが、千原家がそれに加わったことになる。これは小倉藩と幕府領の支配者である日田郡代の間で話がついての上と思われることから、慢性的な財政危機に苦

しむ小倉藩にとって千原家の融資能力を当て込んだ政治的な背景でなされたものであった。つまり、ペリー来航以来の軍備の出費増、九州における譜代藩としての小倉藩の政治的立場を考へての上のことであった。こうして、幕末期の小倉藩の資金調達機関（前述の産物会所の銀主）および幕府の「公金」貸し付けの仲介者として重要な役割を担うのである。

小倉藩には嘉永元年に一〇〇〇両の貸し付けを開始し、以後次第に増加し御用達になった安政元年（一八五四）には四五〇〇両の貸し付けをしている。また産物会所の担当商人（前述の万屋・柏木・堤）あての貸金が嘉永六年（一八五三）以降にみられ、安政二年には小倉藩の貸し付けを上回り、安政四年（一八五七）には一万二六五〇両となり、同五・六年は一万四〇〇〇両台となった。そして万延元年（一八六〇）にはついに二万〇九〇〇両に達し、文久二年（一八六二）・同三年・元治元年（一八六四）は二万七〇〇〇両台におよぶのである。そして、産物会所に廃止された慶応元年（一八六五）には六〇〇〇両余の貸し付けに急減する。

日田金の融資

千原はその外に、日田商人の常として数人の出資者を束ね、その藩の御用達が仲介者として貸金活動を行った。前述の万屋・柏木兩人にたいして三〇〇両の貸金などを千原以外の商人が行っている。また、文久三年は小倉藩では御台場の増設・弾丸製造など長州征伐を控へての軍備増強がなされた年であった。そして、長州藩兵の田野浦占拠があった年である。この年小倉藩が依頼した調達金八〇〇〇両を豆田・隈両町（現日田市内）の者より出金した。追加分の二〇〇〇両は千原家が出金し、残りを他の商人が負担した。さらに、元治元年には長州征伐が行われたが、五〇〇〇両の貸金が行われた。このうち五三五両を千原家が負担し、残りは他の商人から出金が行われた。その後追加依頼された五〇〇〇両は日

第3章 江戸時代

田およびその周辺の富裕層より出金した。

このように、小倉藩の幕末期の火急の財政補填を担っていたのは日田の商人たち、とりわけ千原家の働きが大きかった。

幕府の公金貸付

このほか、千

原家の働きで小倉藩に融資された幕府の公金がある。これは御用達商人の仲介で日田郡代役所より直接貸し出されたものである。小倉藩に対する公金貸し付けが現在判明しているところでは嘉永五年（一八五二）に

第113表 小倉〈本藩〉の「御貸付金拝借」一覧

(楠本美智子「小倉藩の産物会所と日田金」『史淵』120輯)

年代	西暦	小倉 役場	小倉 分家	万屋 柏木 堤	蔵本	上毛郡	仲津郡	京都郡	田川郡	築城郡
嘉永 1	1848	1,000			15					
2	1849	1,800					100			
3	1850	2,150								
4	1851	3,200								
5	1852	2,700								
6	1853	2,500		1,000			1,000		685	
安政 1	1854	4,500		2,400			350		885	
2	1855	4,250	800	5,600			50		910	
3	1856	3,000	500	6,440			650		1,525	300
4	1857	3,000	500	12,650	10		500		655	600
5	1858	2,000	500	14,300	10		700		3,470	
6	1859		500	14,950		120	1,200		1,400	
万延 1	1860		500	20,900	20	120	300		1,223	
文久 1	1861	1,200	800	16,400	20	190	1,500		7,171	
2	1862		800	27,600		420	1,540		2,150	
3	1863	1,000	800	27,130	30	483	100		1,638	
元治 1	1864	1,617		22,170		310			50	
慶応 1	1865	3,700		6,610		530	100		1,200	
2	1866	1,000				600	300	6,000	320	
3	1867	620	500			1,328	1,947		1,429	
明治 1	1868			1,300		3,720	500			
2	1869	4,000				200			50	
3	1870	14,800							1,500	
4	1871									

※単位は両（金）

一〇〇〇両余がある。この時の小倉藩側の窓口は堤平兵衛であった。公金の貸し付けはだいたい十二月の日田地方幕領の年貢納入が終了した時点で開始される。幕府の掛屋になった日田の豪商たちは、この公金を預かり主として近隣の九州の諸大名に日田郡代の了承を得て貸し付けるのであった。千原家を通じて小倉藩に貸し出された公金は前ページの表に掲げるものがあつた（第13表）。

本表から、多くの場合小倉藩領の農村に貸し出しが行われていることが分かる。「公金貸付名目」の欄が空白のものは藩が直接借りたものである。したがって、農民たちが村の困窮を解消するために資金援助を受け農村の立て直しをするために田地を質に入れて借りだしたものがほとんどであった。

ところで、幕末動乱期にあたるこの時期、長州藩と対峙（たじ）を迫られた小倉藩は、台場建設資金などの長州戦に備える軍備増強費の必要から、文久三年（一八六三）公金借り入れの申し出を日田郡代に申し入れた。ところが、日田郡代は公金の準備が出来なかつたので、日田の掛屋商人たちに融通させた（翌年に合計一万二〇〇〇両を調達させた）。そして、同四年には三〇〇〇両の公金貸し付けをした。その上、さらに「小倉軍用金急場入用差し支えに付」の名目で日田周辺の農村部の富裕者・掛屋たちにそれぞれ五〇〇〇両、都合一万両の調達を命じた。

こうして、最初は小倉藩の国産政策の「銀主」としてかかわつた千原家であったが、やがて日田郡代を中心とした日田商人たちの日田金は、九州の対長州藩の前進基地・譜代大名としての小倉藩を背後から支える資金源としての役割を担うことになつたのである。